闢廬沢遺跡

村道改良工事に伴う
緊急発掘調査報告書

1989. 3

長野県原村教育委員会

表紙地図 10,000 分の 1　○印が闘廬沢遺跡

序

このたび、原村教育委員会では「闢廬沢遺跡」の発掘調査を行い、この度発掘調査報告書を刊行する事となりました。

本遺跡の調査は、中学校通学路の道路拡幅工事に先立って行われたものですが、交通機関が発達し便利になる反面、交通事情が悪化してきた今日では、生徒の安全確保のための道路改修は、必要不可欠なものであります。一方、工事によ って失われていく埋蔵文化財も、私達人類の歩んできた歴史の足跡であり、それを後世に残していくことは、私達に課せられた責務でもあります。

そこで事前に遺跡保護のための保護協議を行った結果、工事に先立ち発掘調査を行い、記録として残していくことになりました。調査の結果、出土遺物は少量でしたが、縄文時代、平安時代の複合した遺跡であることがわかりました。本書はその概要の報告であります。

終わりに、この度の発掘調査にあたり、ご指導、御協力を頂いた関係各位に心から感謝の意を表し、序といたします。

平成元年3 月

原村教育委員会

教育長　平林　太尾

例　言

1．本報告は村道改良工事に先立って実施した、長野県諏訪郡原村払沢に所在する闢廬沢遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、原村教育委員会が昭和62年９月９日から12日にかけて実施した。

3．執筆は、平出一治・伊藤　証・平林とし美が話合いのもとに行ない、図面の作図とトレースは平林、写真撮影は平出が行なった。

4．本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係の資料には、27の原村遺跡番号を表記した。

目　次

序
例　言
目　次
Ⅰ　発掘調査に至る経過……1
Ⅱ　発掘調査の過過……3
Ⅲ　遺跡の位置と環境……3
Ⅳ　グリッドの設定と調査方法……5
Ⅴ　土　層……5
Ⅵ　遺　物……5
Ⅶ　ま と め……6
参 考 文 献
発掘調査団名簿

Ⅰ　発掘調査に至る経過

本遺跡が発見されたのは古いことではなく、昭和49年に諏訪清陵高等学校地歴部考古班が実施した分布調査の折りである。昭和54年度に長野県教育委員会で実施した八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査においても縄文土器破片を僅かに発見している。しかし、その範囲については遺物が少ないこともあり、付近の地形と、当地方における遺跡立地を考慮する中で想定している状態であった。

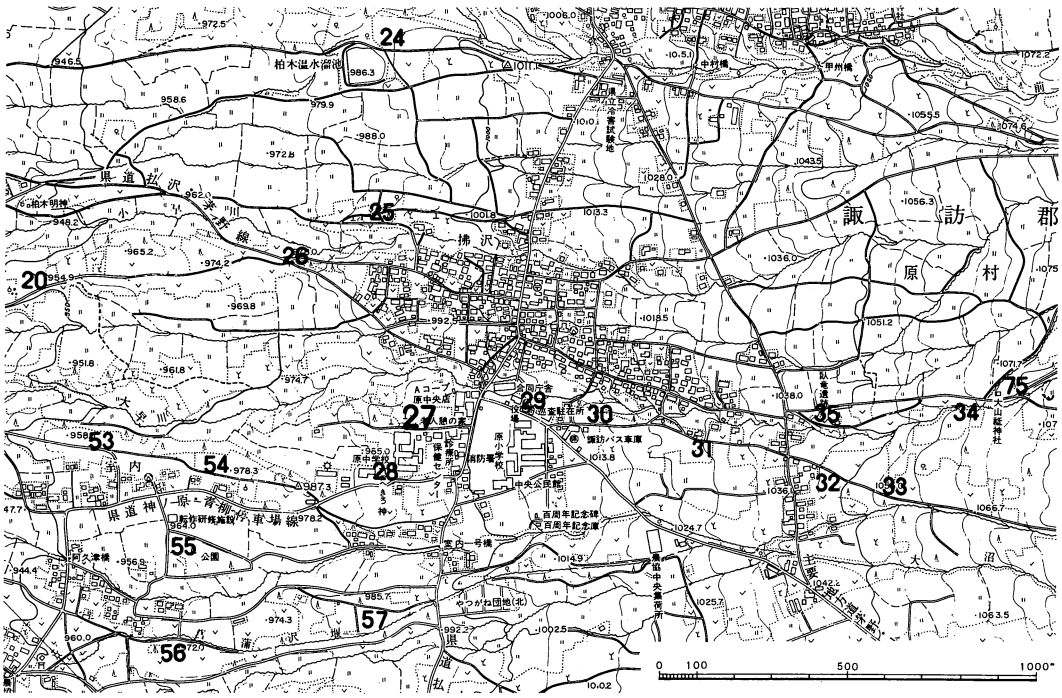
遺跡内には、原中学校の通学路として利用されている農道が東西に走っているが、トラクターをはじめ近年の目覚ましい大型農機具の普及と、付近の宅地化が進む中で乗用車の往来も急激に増加してきている。交通事故の防止を考え昭和59年度に道路改良工事が計画された。

その後、原村役場建設課と保護に関する協議を進め、遺跡は現状のまま保存していくのが最も望ましいが、前記のとおり生徒の交通安全を考える中で、遺跡は記録保存した上で工事を実施することとなり，昭和62年９月９日～12日に緊急発掘調査を実施した。

第１図　調査地区と調査風景（北西から）

表１　闢廬沢遺跡と付近の遺跡一覧

番号	遺跡名	旧石器	縄文 草	縄文 早	縄文 前	縄文 中	縄文 後	縄文 晩	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
20	前尾根					○	○					○			昭和44・52・53年度発掘調査
24	恩膳			○		○	○					○			昭和62年度発掘調査
25	裏尾根					○									
26	家下					○						○			昭和59年度発掘調査
27	**闢廬沢**					○						○			
28	宮平												○		
29	向尾根					○	○					○		○	昭和50・54年度発掘調査
30	南尾根					○						○			
31	中尾根											○			
32	大横道上					○	○					○			昭和42・51年度発掘調査
33	ワナバ					○									
34	栃の木					○	○								
35	臥竜				○	○	○								昭和33・35・36・45・57年度発掘調査
53	雁頭沢					○								○	昭和54・57・63年度発掘調査
54	宮ノ下			○		○						○	○	○	昭和57・58年度発掘調査
55	中尾根					○	○					○			
56	家前尾根					○						○			
57	久保地尾根					○									
75	山の神上			○			○								昭和45・57年度発掘調査



第２図　闢廬沢遺跡の位置と付近の遺跡（1：20,000）

II　発掘調査の経過

昭和62年９月７日　発掘準備をはじめる。

９月９日　グリッド設定を行う。石鏃を採集する。

９月10日　調査の打合せを行い発掘機材を搬入する。

９月11日　層位別にグリッド発掘をはじめるが、ローム層までは深い。

９月12日　グリッド発掘。遺物の発見は少ない上に、地山のローム層の傾斜は極めて強く、その状態は良くない。天候は悪いが写真撮影を行い調査を終了する。
グリッド杭、発掘機材等の片付けを行う。

III　遺跡の位置と環境

闢廬沢遺跡（原村遺跡番号27）は、原中学校に隣接する長野県諏訪郡原村6658番地２付近に位置する。

このあたりは八ヶ岳西麓のほぼ中央に位置し、裾野の２kmほど上から開折のはじまる大早川左岸の幅の狭い尾根上から南斜面に立地している。南斜面の農道南側は中学校建設の際すでに掘り取られて平坦化している。

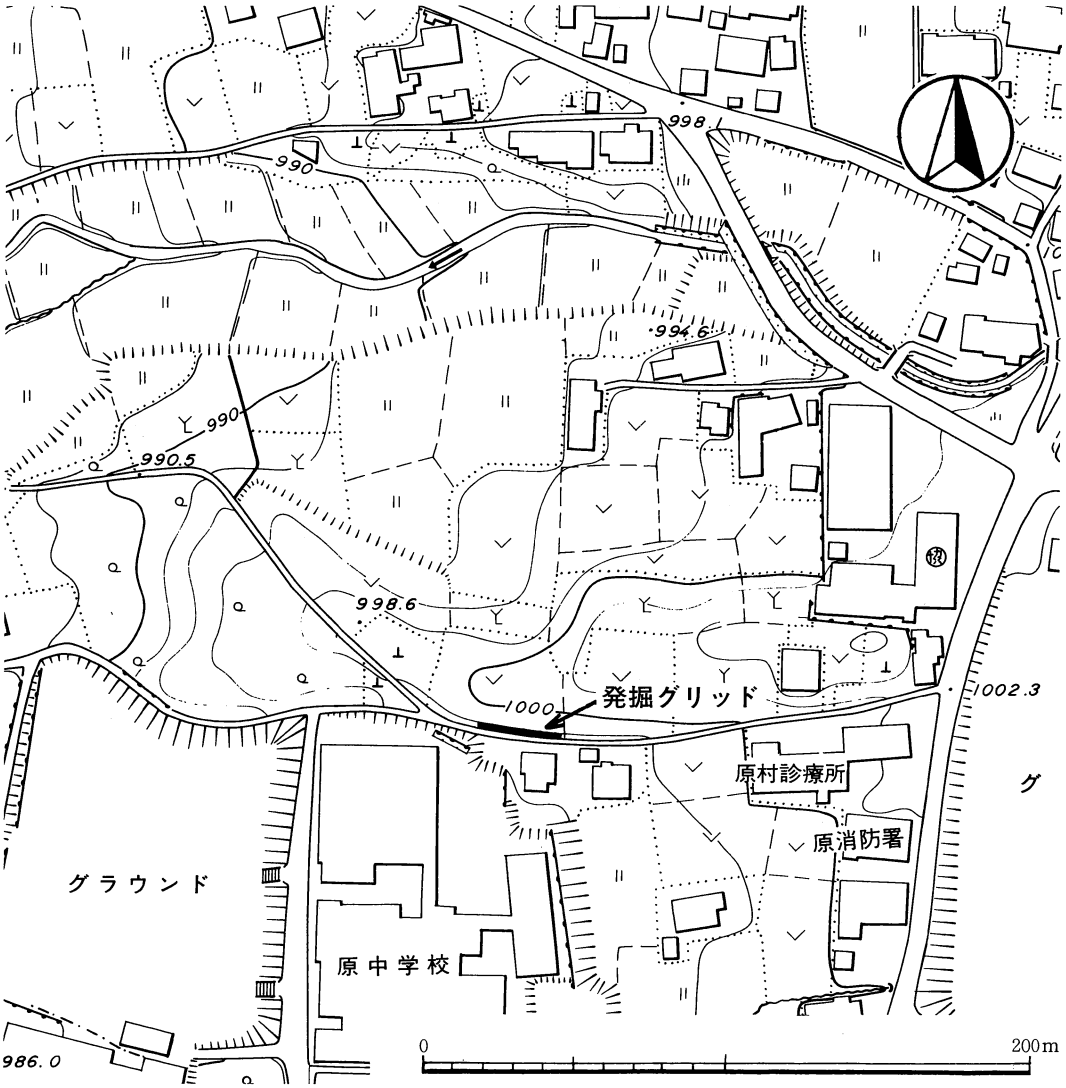
地目は普通畑で標高は1000ｍ前後を計る。付近は宅地化が進み、また、墓地が隣接していることなどから遺跡の保存状態は良くない。

これより西は、約3000ｍ先でフォッサマグナの西縁である糸魚川－静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られる。

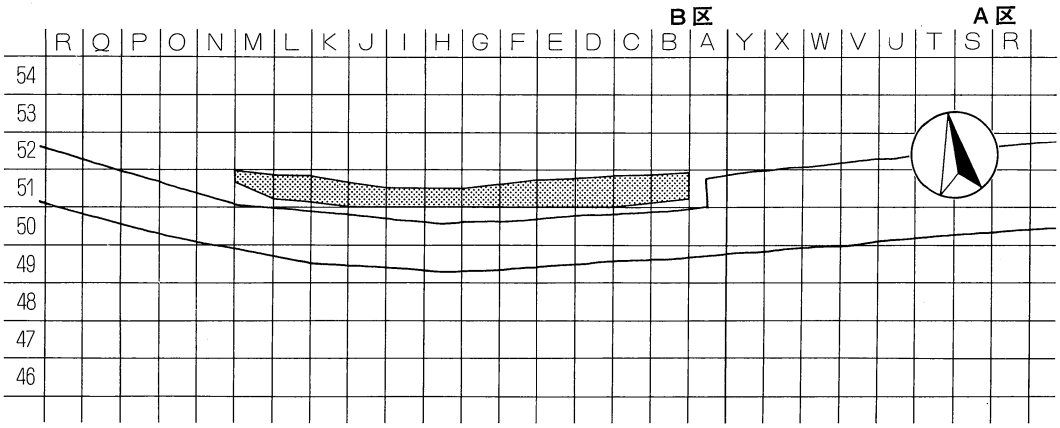
八ヶ岳西南麓一帯の尾根には、縄文時代を中心とした遺跡が数多く埋蔵されている。この闢廬沢遺跡の周辺には、大小様々の遺跡が分布しており、その密度は極めて高い地域で、第２図および表１に示したが、遺跡の高度限界は標高1200ｍ前後のラインである。

それらの中ですでに発掘調査されている遺跡は、20の前尾根・23の恩膳西・24の恩膳・29の向尾根・32の大横道上・33のワナバ・35の臥竜・53の雁頭沢・54の宮ノ下・75の山の神上と多く、縄文時代中期から後期初頭にかけての住居址や土器・石器が数多く発見されている。

しかし、まだ発掘調査されたことのない遺跡や、調査されていてもその対象範囲が狭く、遺跡の性格については不明瞭な点がまだ多く残されてはいるが、縄文時代中期から後期初頭にかけての遺跡群が形成されている地域であることは確かなようである。



第3図　闍廬沢遺跡発掘調査区域図・地形図（1：2,500）



第4図　グリッド配置図（1：400）

Ⅳ　グリッドの設定と調査方法

発掘に先立ち、道路改良地区に軸を合せたグリッドを設定した。東西方向には50mの大地区を設け、東からA地区・B地区というようにアルファベットを用いて地区割りをした。対象地域が狭かったが，遺跡の範囲が明確でなかったことから、対象地域を遺跡の中心部と考えB地区と呼び、大地区の中をさらに2×2mの小地区（グリッド）に分割し、東西方向は東からA～Yのごとく区分した。南北方向には算用数字をふった。対象地域を51とし、そのラインを基準に南方向は50・49・48というように南に行くにしたがい小さくなるように、北方向は52・53・54と大きくなるように振り分けた。

個々のグリッドの呼びかたは、たとえば第4図右端の発掘グリッドでみると、大地区はB地区であり、小地区の東西方向はBラインにあたり、南北方向が51ラインで、それは「B－51」となる。したがって小地区の前に大地区を表記した「BB－51」となる。

発掘は、現道部分はすでに掘り取られているため、その対象は拡張部分で、ローム層上面まで層位別に行った。対象範囲が狭いこともあり完掘したグリッドは無く、結果的にはトレンチ状の発掘となった。

Ⅴ　土　　層

第4図のグリッド配置図に示したように、12グリッドの平面発掘を層位別に実施したが、ローム層までの深さは80～95cmで、グリッドによって違いがみられた。

本遺跡の基本層序は、上層から20cm前後の耕作土（第Ⅰ層）．ローム細粒混入褐色土（第Ⅱ層）．黒色土（第Ⅲ層）．ローム混入褐色土（第Ⅳ層）．ローム層（第Ⅴ層）に大別できる。グリッドによっては耕作の攪乱が第Ⅲ層の黒色土まで達していた。

調査地区のロームの傾斜は耕作土の傾斜に比べると極めて強い。第Ⅱ層のローム細粒混入褐色土は、尾根上の耕作土がロームを粉砕していることから、尾根上から流れ出したものが堆積したと思われる。

Ⅵ　遺　　物

発掘調査の結果、縄文時代の土器破片2点と石鏃1点、平安時代の土師器破片2点、時代不詳

の土器破片３点、現代の古銭１点を発見しただけである。遺物包含層を確認することは出来なかったし、遺構を検出するまでにも至っていない。

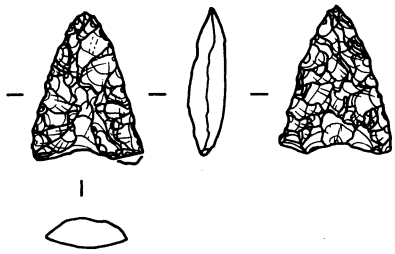
1　縄文時代の遺物

（１）土　　器

図示しなかったが２点とも無文の小破片で、帰属時期及び器形を判別できるものはない。

（２）石　　器

表面採集した黒曜石製の石鏃１点で、当地方で一般的に見られるものである（第５図）。



第５図　石器実測図（１：１）

2　平安時代の遺物

（１）土　　器

やはり図示しなかったが、２点とも杯の小破片である。

3　現代の遺物

（１）古　　銭

図示しなかったが明治19年発行の半銭銅貨１点である。

V　まとめ

調査の結果、縄文時代と平安時代の複合遺跡であることがわかった。遺物の出土状態からみて希薄な遺物散布地であり、遺構の埋没は考えられない状態である。これが、本遺跡の性格であるが、当地方における集落遺跡と本遺跡のような小規模遺跡が、当時どのような関係にあったかは今後に残す研究課題であろう。

調査区南側は、当地方における平安時代の遺跡立地に適しているが、中学校の建設ですでに掘り取られ遺跡は消滅している。北側のやせ尾根上はロームを粉砕し耕作している状態であり、遺構の埋没は考えられないし、東側もやはり掘り取られ平坦化されている。西側は墓地となり、闢廬沢遺跡は消滅したようである。

最後に、関係者各位ならびに発掘調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

参　考　文　献

1974．07　諏訪清陵高等学校地歴部考古班「原村の考古学的調査　上」（『土』8）

1980．03　長野県教育委員会『昭和54年度　八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書』

1985．07　原村役場『原村誌　上巻』

発掘調査団名簿

団　　長　平林太尾（原村教育委員会教育長）

調査担当者　平出一治（原村教育委員会）

調　査　員　伊藤　証（原村教育委員会）

調査補助員　平林とし美

調査参加者　菊池利光　早川卓二　小林静子　藤原智恵子　宮坂とし子　五味とし子　（順不同）

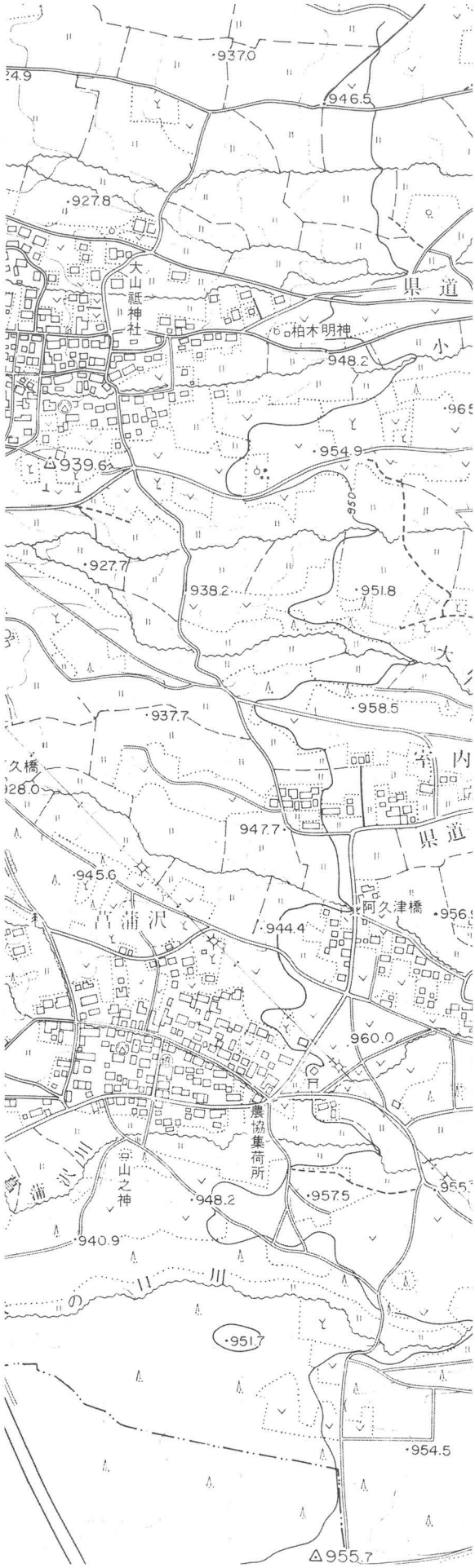
事　務　局　原村教育委員会事務局――行田竹輝（教育次長）　武田伊都子（係長）　大口美代子（主任）　邊見茂子　佐貫正憲

原村の埋蔵文化財12

闢　廬　沢　遺　跡

村道改良工事に伴う
緊急発掘調査報告書

発行日　平成元年3月10日
発　行　原村教育委員会
長野県諏訪郡原村
印刷所　ミウラ企画書籍


937.0
946.5
927.8
大山祇神社
県道
柏木明神
948.2
954.9
939.6
927.7
938.2
951.8
958.5
937.7
久橋
928.0
947.7
945.6
阿久津橋
944.4
960.0
農協集荷所
山之神
948.2
957.5
940.9
951.7
954.5
955.7